

imagine dungeon

にゃんこすきやねん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

tinydungeonの世界に上条さん召喚!!?

でも、多分身体能力上げないと上条さん即死じゃね?と思つたので、白鷺姫と同じくらしいの身体能力にしました。

…あれ?前兆の予知組み合わせると案外強い?

独自解釈有りです。

# 目次

少年の名前は……	1
事件の始まり	6
不幸少年の介入	11
行間：幻想殺しVS竜魔の紅刃	17
自己紹介と説明	21
27 行間：幻想殺しVS竜魔の紅刃2	



# 少年の名前は…

トリニティ。

それは、約10年前に起きた滅界戦争に起因して造られた学園。

勇者の育成と力の保持の為の教育機関で、そこで生き残る為には実力が必要だ。

実力を示せられなければ、退学も有り得る基本的には物凄く厳しい所だ。

そんな厳しい学園で、学園唯一の男の人族白鷺姫しらさぎひめは奮闘していた。

姫「これで…どうだ!!？」

デイル「くっ…まだまだ!!？」

模擬戦のハズが、少し熱が入っているようだ。

その理由は簡単だ。

皇女「お兄ちゃんががんばれー!!?」

リンセ「お父様ー愛してまーす??」

…リンセの応援がおかしいが、つまり妹や娘の前でカッコつけてるだけだ。

ちなみにリンセは「娘」とは言うが、妹の皇女と同じくらいの少女だ。

ツッコミどころ満載だが、彼女は未来から来ているので、皇女と同じくらいの年齢なのだ。

そして、この日もいつもと変わらない平穏な日常である。

そう…とある少年が来るまでは。



本来なら八翼で止まるのだが、儀式兵器の性質で、進化したのだ。

まあ、余り詳しく語る必要は無いだろう。

ぶつちやけ、彼女も「白鷺姫ハーレム」の一員だし。

ちなみに、現在は書類の整理をしていた。

量から考えると、本来補佐のフォンと言う毒舌少女と一緒に済ませるレベルだ。

ヴェル「まあ、仕方ないか。

まさか、人族の男がこのトリニティに来るって言うし。

でも、なんで転入でも転校でも無く見学なのかしら？

しかも、「場合によっては戦闘も許可する」とかなんなの？

とりあえず、フォンが認めるレベルなら間違いないでしょうからフォン行かせただけ。」



ま、有り得ないか。と思いつながら少年のプロフィールを読む。  
そう…愚痴っついておいて、実はちやっかり面倒を押し付けただけだ。

ヴェル「それにしても、「学園都市」に超能力ね〜…。

胡散臭いことこの上無いわね…。

大体、この子…超能力開発の盛んなハズの学園都市で無能力者じゃない…。  
多分フォンも連れてこないでしょ。」

その書類に書かれた少年の名前は

『上条当麻』

## 事件の始まり

姫「…ふうっ…。今日は俺の勝ちだな。」

デイル「はっはっは。姫っち頑張り過ぎっしょ。

勝率は変わらないんだし。」

そう。本来なら姫はデイルには勝てないはずなのだ。

儀式兵器を持たず、魔法が使えない上に身体能力ではデイルの方が上だろう。

では、何故勝てるのか？

それは、「真眼」と呼ばれる技術を使っているから。

それだけでは無いが、やはり有ると無いでは全く違う。

素手と武器持ちくらいの差…みたいなものだ。

実際には、魔法が絡んでくれば素手と戦闘機くらいの差だ。

それが、ボクサーと素人…もしくは機関銃と拳銃くらいの差になる。

詳しい説明は省くが、とにかく先読みの技術だと言うのは確かだ。

そんなこんなで今日も無事(?) 訓練を終了しようとした。

姫「さて…切り上げ…!!?」

途端、時間が止まり「世界」が一変した。

それはかつて姫や皇女みこの経験した「可能性の世界」。

姫「一体何が…!!?」

??「はじめまして…白鷺姫。でも、貴方はこの世界は初めてじゃないでしょ?」

驚いて振り向いた先には、フードを被った少女がいた。

というか、この可能性の世界の住人達はフードが流行っているのか?

姫「…どうやら、『また』俺は剪定者らしいな。」

??「はいよく出来ました。」

でもでも、やっぱり貴方は私にとっては邪魔だし、『あの子』が貴方と接触する前に倒しちゃいます。

恨むなら、『あの子』を恨んでね?」

パチンツ!!?と指を鳴らすと、以前ノートルウムの世界と元勇者パーティとの対決の時に見た、あの「怪物」が現れた。

その「怪物」は、神族を取り込む事で強くなる異形。

「あの」ミヤですら、操る事を諦めた程の強さを誇り、なおかつ例え姫パーティ勢ぞろいでも恐らく撃破は難しい難敵。

魔導兵器とも言える反則的な強さを持っている。

それだけではなく…

姫「あれは…まさか…魔剣!?!?」

ヴェルの世界で見た「魔剣」。

それをあの「怪物」は持っている。

姫（厄介な!!?）

「怪物」だけでも手一杯なのに、「魔剣」持ち。

とてもじゃないが、太刀打ちは不可能だろう。

だが、簡単にやられるつもりは無い。

いくら強いとは言え、相手は力押ししか出来ないデクノボーみたいなものだ。

「真眼」と「カウンター」。

この2つしか持たないが、粘って戦っていれば皇女の時のように、カミシアが介入してくれるだろう。

白鷺姫限定ではあるが、縁のある物を媒体にこの世界だろうが、異世界だろうが繋ぐ事の出来る魔法。

多分リンセか皇女しか来れないかもしれないが、どちらかがいれば流れは変わる。

?? 「あ、もしかしてカミシアの介入期待してる？

無駄だよ。だって私の魔法は断絶。

例えカミシアの魔法でもここには来れないから。」

そして、絶望的な鬼ごっこがはじまった。

## 不幸少年の介入

あれからどのくらいの時間がたっただろうか？

ある時は身をよじり、ある時は転がって避け、なんとかカウンターを当て、どうにかこうにか未だに戦闘が続いている状態だ。

ハッキリ言おう。

彼はよく健闘している。

倒せないのは仕方ないが、普通なら恐らく瞬殺でもおかしくない。

もちろん、「怪物」が何も考えずに、高威力な攻撃しかせず、変化もないのだからさして難しいわけではない。

だが、考えても欲しい。

今日の前にいる「怪物」は、言わばロボットのようなものだ。

しかも、感情もないロボットである。

そんな相手にダメージが通るだろうか？

答えは否（いな）だ。

果たして、どのくらいの間がそんな奴を相手に出来るだろうか？

これだけでも分かって頂けるだろうか：彼が健闘しているのが。

しかも、彼女が言う通り：どうやら助けは来ないと見ていいようだ。

いくら単調な攻撃とは言え、威力は恐らくウルルの若干手加減程度の威力だ。

当たればよくて骨折とついでに意識を奪われる。

だが、最悪「死」が待ち構えている。

：それはどれ程のプレッシャーだろうか？

「死」を隣に感じながらの戦闘など、ほとんどの人間は経験が無いだろう。

姫にとって唯一不幸中の幸いだったのが、ここがトリニティである事だ。

しかも、姫は何度も似た様な経験がある。

だが、倒せない以上精神的疲労と肉体的疲労が積もる。

さすがに、姫が限界かと思われたその時：



☒ 「うおおおっ!!?」

と言う声と同時に、〃ツンツン頭の少年〃が〃飛んで〃来た。

☒ 「何?」

姫 「…は?」

うん…意味分からんわな?

そもそも、〃何故動けるのか〃?

と言うか、誰?

そんな疑問を抱いたが、1つ気になる事がある。

〃どこに向かって飛んでいる?〃

そんなのは簡単だ。

「怪物」に向かって飛んでいるらしい。

ただし、〃武器も持たずに〃飛んで行ってるらしい。

姫 「!??」

ようやく色々と落ち着いて思考出来たが、このままではあの少年が向かう結末は決まっている。

と言うか、武器も持たずに何で「右手を突き出している？」

何をしたいのかは分からないが、取り敢えず「怪物」の注意を惹き付けるしかない。「怪物」の目の前に立ち、腕に刀を叩きつける。

さすがの「怪物」も、若干怯む。

そして、少年の右手が「怪物」に触れたその瞬間：

パキーン!!?

ガラスの碎ける音が鳴り響く。

と、同時に「怪物」が動きを止める。

☒ 「なっ!!?」

フードを被った少女にも想定外だったらしく、驚愕に染まる。

当然、姫にも想定外だっただろう。

啞然としていたら：

☒「まだだ!!?腕を攻撃してくれ!!?」

姫「!!?うおおっ!!?」

言われた通り、全力攻撃。

何とか腕を落とした。

しかも魔剣の方。

当然だ。アレを持つてる限り例え気絶していても油断は出来ない。

ヴェルの扉の時に学んだからこそその判断だ。

ツンツン頭の少年が、何とか速度を殺せたらしく、着地した後魔剣の近くに寄り、右手で魔剣に触れたら魔剣が折れた。

☒ 「大丈夫か？」

姫 「あ…ああ。大丈夫だ。…あんた何者だ？」

☒ 「俺か？」

少年は、フードを被った少女を警戒しながら振り向き、  
上条 「俺は上条当麻。普通の高校生だよ。」

と、名乗った。

これから起こる事件<sup>ふじこう</sup>を…幻想を殺す為に。

## 行間：幻想殺しVS竜魔の紅刃

ブオン!!?と言う、聞いていて「当たったら死ぬな。」と思わせる攻撃が、既に数時間行使されている。

ちなみに、地面や壁などはその攻撃の度に削られている…いや、抉られている。その体のどこにその力が有るのかは分からないが、とりあえず一つだけ分かっている事がある。

上条「ああー!!?もう、不幸だあー!!?」

攻撃されているのが、上条当麻である事だ。

何故このような事になっているのか?

遡る事数時間前の話だ。

上条「え？学外授業？」

学校が終わり、さて、今夜は何食おうか？なんて考えていたら、何故か黄泉川先生に呼び出された。

何でも、上条が休みの間体育でも授業日数が足りなくなってる事実と、体育の担任が何故か急病で休んでいる事実から、学外授業をする事になったらしい。

期間は決まっていないが。

黄泉川「だがな？一応学園都市では超能力が一般的で、ハッキリ言う外との差がよく分からないのが事実じゃん？

だから、その实力を見に外部から査察みたいなのが来るみたいじゃん。

んで、通ったら外部の学校にしばらくお世話になるつてのが一連の流れじゃん。」

上条「え？じゃあ、通らなかつたら？」

もちろん、と言いながら振り向いて、優しい目付きで、

黄泉川「新一年生と一緒に面倒見てやるじゃん♪」

上条「やつぱり!!？と言うか、黄泉川先生!!？既に担任決まってるの☒つか、何その目!!？ちよつ!!？本当に留年の危機なんですか？」

黄泉川「なんでも、実力主義な学校らしくてな。

学力は当然だが、武力がモノを言うような学校らしいじゃん。

だから、死なない程度に頑張るじゃん♪」

上条「なんか負ける事が前提に!!? 留年とか冗談じゃない!!? と言うか、何その死亡フラグ!!?」

…あれ? ちなみに、それいつやるんですか?」

ちよつと嫌な予感。

黄泉川「いつやるか? 今でしょ!!? じゃん。」

上条「それ言いたかっただけでしょ!!? え? 本当に今から? ちなみに相手はどんな方でせう?」

黄泉川「相当な実力者らしいじゃん。多分ウチらで言う大能力者<sup>レベル4</sup>から超能力者<sup>レベル5</sup>相当だと考えた方がいいじゃん。」

上条「マジですか…。」

上条が思い浮かべる大能力者<sup>レベル4</sup>と超能力者<sup>レベル5</sup>の代表は、おそらく白井<sup>やっかいなふたり</sup>と御坂<sup>だろ</sup>だろう。

まあ、彼女の場合はむしろ黒夜最強の矛と盾と絹旗に近いが。

そして、決闘場所に着いてから、思い出した衝撃の事実。

黄泉川「あ、そうそう。相手は見た目可愛い女の子らしいから、頑張るじゃん♪」

上条「まさかの死刑宣告!!? 何もしてない女の子殴れないの知ってて今言うんですか!!?」

黄泉川「既に、先方は公園に着いてるじゃん?」

だったら、女の子を待たせられないのも男じゃん?」

上条「デートと書いて死闘は勘弁願いたいのですが!!? つてあれ? ここじゃないんですか?」

黄泉川「公園は顔合わせだけじゃない? さすがにほとんど誰も来ないとは言え、公園は危ないだろうし、封鎖もできないじゃん?」

だったら、一応顔合わせしてなるべく被害の少なさそうな所で決闘するじゃん?

ついでに、連れて行くかどうかを決めるのはその対戦相手だけじゃん。」

だからと言いなからこちらを見て、

黄泉川「友達あを助けた日のアレがマグレじゃないのを期待してるじゃん♪」



## 自己紹介と説明

ヴェル「で？アンタが学園都市から来た少年でいいのね？このクソムシ。」

上条「…ふあい。ほうでふ。」

「それから、ゆるひてくらはい…」

前回白鷺姫をかつこよく助けた人物とは思えない程ボコボコにされている上条がいた。

簡単に説明するなら、ラッキースケベいつものやつが発動したのだ。

しかも、ウルルに。

オペラ「白鷺様の足元に置いたハズのボールがコロコロと上条様の足元に行っちゃいましたからね。」

まあ、可愛いウルル様が見れたからいつかな？とか思っちゃいました♪テヘツ☆  
ウルル「良くないよ!!？」

いきなり押し倒されてビックリしたから思わず気憐でぶっ飛ばす所だったよ!!？

何故か使えなかったけど!!？」

上条「つか、犯人アンタか!!？」

俺軽く死にかけてんじゃん!!」

上条やウルルからすればたまったもんじゃないが、反省する気は無いようだ。

このままでは埒があかないので、姫がいさめてとりあえず自己紹介をすませた。

べ：別に面倒だから省略したとか、書くのが面倒になっただけじゃないんだからね!!

(笑)

ヴェル「それはそれとして、何故可能性の世界で動けたかの説明がまだよね？」

上条「あ、そう言えばまだフォンって子に教えただけじゃねえかな？」

フォン「一応ちよつとだけ聞きましたね。」

《幻想殺し》イマジンブレイカーでしたっけ？」

上条「ああ。俺の右手には《幻想殺し》イマジンブレイカーが宿っている。

それが異能の能力ちからであれば、戦略級のレールガンだろうが、灼熱の炎だろうが、神様

の奇跡だろうが打ち消す能力だ。」

ヴェル「それだと可能性の世界で動けた理由が分からないんだけど？」

上条「知り合いに聞いた限りじゃ、この《幻想殺し》イマジンブレイカーってのは世界の基準点らしくて

な。

実際、回復系の魔術なんかも無効になるし。」

ヴェル「…うーん…。」

こんな事ならフォンじやなくて私が行けば良かったのかも。  
…そうね。

よし、決めた♪」

上条「…物凄く嫌な予感がするんだけど。」

ヴェル「ミヤ。

上条と戦いなさい。」

ミヤ「そうですね♪」

あ、ぶつ殺して良いですか？」

ヴェル「半殺しならいいわよ。」

上条「ちよつと待て!!？」

どんな起承転結が有ったらそうなる!!？」

つか、半殺しでも許可すんなよ!!？」

ヴェル「ま、冗談はさておき、アンタの相性的にミヤしか相手はいないのよ。

全員の見てる前でアンタの能力を確かめる為には戦闘が手っ取り早いの。

本当に異能全てを打ち消せるのかを見たいのも有るのよ。」

上条「いや、でもなあ…。」

ヴェル「なら、アンタの勝利条件は、5分間攻撃を捌ききるって事ならどう？」

それに、確か単位だっけ？足りないと思わなうん？

断れないと思うんだけど？」

上条「うぐっ…分かったよ。」

仕方ない…か。」

ヴェル「あ、でも負けたら留年決定ね。」

上条「いや、なんでだよ。」

ヴェル「本来、トリニティの試験を受けなければ在籍は不可能なの。」

たしかに上条の件は特例だけど、だからと言って簡単に通す訳にもいかない。

簡単なテストくらい受けて欲しいの。」

上条「…ま、ついでに人となりを見たいのも有るんだろ？」

ヴェル「あら？」

落ちこぼれて聞いてたからってつきり気付かないと思つてたのに。」

上条「心外な…。」

まあ、そんな事なら…分かったよ。」

数分後の対決に向け、学園長室から出ていく上条とミヤ。

それと同時に残りの全員で話し合う。

ヴェル「どう思う？」

オペラ「やはり、元勇者の能力に似てますね。」  
姫「右手限定だけど、確かに。」

アイツも元剪定者なのか？」

カミシア「それは無いと思うぞ？」

願うにしても中途半端な能力だし、そもそも生まれつきの可能性すら有る。」

ノート「ちなみに、こつそり回復魔法使ってみました、本当に効かないんですね。」

アミア「さらつと凄いことしてるよね。お姉ちゃん。」

確かに、多分紅さんも補助魔法掛けてるよね？

上条って人に。」

紅「ああ。」

だが、やっぱり効果は無かった。」

ヴェル「…この時点で私のやりたかった事の三分の二くらいは終わってたから戦闘にしたのよね。」

しかも、ミヤの魔法なら目に見える形で分かりやすいしね。」

アミア「だったら、わたしがレーヴァテイン使えば早かったんじゃない？」

ヴェル「それでも良かったんだけど…何となくそれだけじゃなさそうなのよね。」

他にも試したい事有ったし。」

ノート「でも、ボクちよつと気になる事が有るんですけど。」  
ヴェル「何？」

特に変わった事は…。」

ノート「彼の宿泊先と言うか、泊まる所どうするんですか？」

男子寮は、二人ほど理解者がいるとは言え危険なんじゃ？」

ヴェル「…あー。その件なら問題ないわよ。」

きつと、それは不幸の前触れだから。」

## 行間：幻想殺しVS竜魔の紅刃2

公園に着いたら目の前に混沌があつた。

?? 「なるほど。」

こちらの自動販売機とやらは、お金を飲んだが最後出ないんですね？」

?? 「そうなのよ。」

だから、お金入れる前で良かったわ。」

?? 「だからと言って風紀委員ジャッジメントの目の前で犯罪の真似事はよして下さいな？」

いかなお姉様とは言え、見逃せませんの。」

?? 「とか言いつつ、美琴さんでしたっけ？」

彼女から貰った飲み物は貰うんですね。」

?? 「当然ですよ!!？」

お姉様の愛が詰まってる物を捨てるハズ有りませんか!!？」

こうしてはいられませんの!!？」

おねええええさむわあああああつ!!」

美琴 「くつつくつこうとすんな黒子!!？」「ビリビリっ!!」

白井「あばばばばばば!!」

??「…竜族以外でもこう言うことあるんですね。

おや?」

かみじょうはかたまっている。

上条「…よし、今日は特売だから帰るか!!?」

黄泉川「帰るのは勝手だけど、その場合留年って分かってるじゃん?」

上条「だって御坂達までいるじゃん!!?」

これ、絶対面倒になるヤツですよ!!?」

つか、あのちっこいのが相手とか頭おかしいからな!!?」

フォン「フォンをちっこいだけだと思わないでほしいですね。

と言うか、やはりここでは知名度ゼロですか。

魔界の死神もまだまだですね。」

美琴「あくくたくはく…!!?」ビリビリっ



上条「げっ…!!?」

美琴「またなのカー!!?」バリバリっ!!

上条「のわっ!!」ヒョイ

白井「…チツ!!?」

上条「舌打ちすんなよ怖いから!!?」

つーか、またって何だよ!!?またって!!?」

黄泉川「…イチャイチャしてる所悪いが、そろそろ話をはじめてもいいじゃん?」

フォン「…フォンの常識がおかしいんでしょうか?」

アレでイチャイチャになるんですかね?」

白井「当然ですの。」

お姉様の愛の鞭ならぬ電撃ですの。」

黄泉川「…ほっとくとどんどん話が逸れていくじゃん?」

フォンとか言っただじゃん?」

トリステインの関係者で間違いないじゃん?」

フォン「あ、はい。」

フォンは、フォンllテルムと言います。

同年代では魔界NO.2ですね。」

上条「魔界？なにそれ？」

ゲームか何かの設定か？と思っていたら

黄泉川「…」

美琴「…」

白井「…」

あれ？何か憐れみの目で見られてる？

美琴「…現状は全く分からないけど、強く生きるのよ？」

優しい…だと!?

白井「…科学的な考え方では有りませんが、ちゃんと供養はしますの。

あ、お姉様の事はお任せくださいませ。」

なん…だと？

黄泉川「…知らなかったとは言え、スマナイじゃん？

大丈夫。ちゃんと席はとっとくじやん？」

上条「え？何？

マジでヤバイの？」

美琴「あー…彼女の実力を学園都市で例えるなら、多分超能力者クラスって言えば分

かるかしら？」

上条「…マジ?」

美琴「マジね。」

ちなみに、実力的にはちよつと分からないけど、アンタなら分かるんじゃない?」

上条「…考えたくも知りたくもねえ…。」

フォン「それよりも、一応移動しましょう。」

公園じゃなんですし。」

上条「…どうせラスボス的な展開で逃げられないんだろ? かな。…不幸だ…」

さすがに美琴達も着いていく事はしなかった。

だつて上条の自業自得だし。

移動をしながら軽く説明をする。

フォン「まあ、絶望的にならないでください。」

一応条件と言うか、テストの内容は若干簡単ですから。」

上条「そのの?」

フォン「どんな手を使つても構いません。」

フォンにダメージ…つまり、『痛い』と言う言葉を言わせれば勝ちです。」

普通は無理だけだな。

上条「でもさ、逃げたり避けたりされるとなあ…。」

フォン「つと…：こらでいいでしょう。そこもハンデです。

逃げも隠れもしません。

フォンはここに立ってるだけです。」

一応念のため気鱗（きりん）は纏いますが。と小声で付け足す。

上条「…本当に？」

フォン「フォンは嘘つきません。」

上条は右手でチョップした。

「パキンッ」

と言う音が聞こえ、同時にゴスツと言う音が後から響く。

フォン「あいたっ」

フォンはさすがに困惑した。

「痛い？」あり得ない。

今のは本当にただのチョップだった。

その前に聞こえた謎の音は？

目の前を見ると「おーい大丈夫かー？」と間拔けな無能力者<sup>上</sup>。

結論から言えば簡単だ。

上条の持つ幻想殺しイマジンプレイカーが発動したのだ。

だが、それを知らない方からすれば謎の力だ。

そこは一応歴戦の戦士でも有るフォンだ。

フォン（…恐らく、彼の力はある勇者と似たような力なのですかね？）

勇者の力は、魔力や気鱗の霧散だった。

近付いただけで敗北は決まっているような能力だ。

ましてや、その勇者は身体能力も高く、本当に近付いたら負けだ。

フォン（…ですが、納得できないのは事実。）

そう…勇者のように近付いたら魔力や気鱗が消える感覚は無かった。

と、なると？

フォン（恐らくですが、何かのトリガーで消される類い？）

そこはちゃんと戦わなくては分からない。

そう思った。

上条「あれ？これ一応テストは合格？」

フォン「一応そうですね。」

ですが、念のため戦闘もしましょう。」

上条「決定なのかよ!!？」

フォン「そうですね。

予想外の事態なので。

いくら、無能で馬鹿そうでも人間を侮るといけないのを忘れていたフォンが愚かでした。」

上条「なんか人間がデイスられてる!!」

フォン「なので、無能で馬鹿な貴方にも全力で相手します。」

上条「デイスられてるの俺だった!!? ってちよつと待て!!?」

全力でとか言った?」

フォン「ええ。

無能で馬鹿でクズでノロマでアホな貴方にも全力でいきます。」

上条「めっちゃやデイスられてる!!」

俺なんかしたっけ!!?」

フォン「特には?」

あえて言うなら生きてる事ですかね?」

上条「存在否定!!? ちなみに得物とか持ちませんよね?」

フォン「貴方はあの人よりは弱いでしょう。」

なので、素手で戦ってあげます。(気鱗が消えるかどうかの確認もありますし。)

さあ…死ぬ気でかかって来てくださいね？」